

龍源寺の歴史について(二)

松原 泰道

福沢諭吉先生は、中津の奥平藩の藩士でしたから、江戸に塾を開く前に、当寺で数名の弟子を教えておられました。中津藩の江戸の寺であったため、古いお檀家はすべて中津藩の人たちで、また福沢門下がたくさんおいででありました。(奥平家の江戸屋敷の寺は当寺の外に品川に清光院があります。)

故老の福知宜一翁のお話によると、文久二年(一〇三年前)の頃、奥平昌服公が上屋敷の東御殿を寺に寄進されたのが、現在の寺の建物の一部だそうです。更に当事、オランダ座敷といわれた中屋敷の建具が寄進されて共に現存しています。

この建具は、その頃ならモダンを誇ったものと思われませんが青いペンキ塗りで、骨も太くハシゴにも

なりそうな丈夫なものです。張り替えにはノリがたくさん必要ですが、今度の改築にも何とか保存したいと思います。

今の寺の建造物は、御承知のようにスリバチを伏せたような低い建て方ですが、江戸の強風に備えるためには、低い屋根で柱を多く使う必要があったのだそうです。

前号にも、ちよつと触れましたが、寺の入り口にあった大きな老松が目標になって、寺の名よりも「松の木寺」で通りました。慶應義塾の野球の元老で、「時事新報」の営業部長だった神吉さんが、同校の野球監督だったころ、よく龍源寺で合宿したそうです。綱町のグラウンドが近くにあったからです。選手達は坐禅をしたり、時には、その老松に「首つり」があると、それにさわって「ハラをきたえた」由。

当事、いかに閑静であったか想像できます。戦後、古川の上流

にあった工場が全部戦災に遭ったため、川の流れがよく澄んで、子供たちが楽しそうに水遊びをしていました。それを思えば、数十年前にアユがすんでいたのもほんとうでしょう。その川は今ほドブ川となり、松は煙害で枯れました。そして高速道路が走り、五〇メートルのじゅんかん路線がつきぬけ、地下鉄も予定されています。

前号に記しましたように、現在地に移建されてから二百六十九年になりますが、この間のいろいろの天災には幸い難を逃れてまいりました。たびたび江戸の街を焼き払った大火にもあわず、関東大震災にもひどく傾きましたが倒壊することなく、去る大戦にも空襲をまぬかれました。たくさんの震災の避難者や戦災の罹災者が、長い間、仮寓の生活ができたのも先人のおかげです。(つづく)

〔竜源寺報〕第八号 昭和四十年三月五日発行より抜粋〕